

サッカー協会の国際感覚を疑う

1月9日、FIFA年間表彰式が盛大に開かれ、各部門の最優秀賞が授与された。個人賞など日本人にはほど遠いと思っていたが、昨年の「なでしこジャパン」のW杯優勝で期待が高まった。女子監督賞は圧倒的大差で佐々木監督が受賞し、女子最終選手賞も沢穂希が見事受賞した。これに加え、日本サッカー協会がフェアプレー賞を受賞し、世界が注目する晴れ舞台で、日本人が三度も壇上に上がるという「日本デー」になった。東日本大震災への思いやりも加味されたかもしれないが、自他共に認める受賞であったことは間違いない。

セレモニーはEurosportで全世界に放映された。日本出発前のインタビューで、佐々木監督は「受賞できたら、あっと驚くパフォーマンスをする」と答えていたので、期待していた。英語でスピーチするものだとばかり思っていた。ところが、なんと日本語で喋り始め、その途端に会場がざわめきだした。会場参加者には同時通訳サービスがあったようだが、英語スピーチが主なので、ほとんどが利用していなかったように見えた。Eurosportも日本語からの通訳を用意しておらず、アナウンサーは通訳できませんと映像をそのまま流していた。なんとも残念なことである。沢選手も同様に、日本語のスピーチだった。日本の新聞には、「日本語で堂々とスピーチ」という記事もあったが、これは違う。受賞者のスピーチは日本人以外の誰にも理解されなかった。数千万あるいは数億の世界のサッカーファンが注目しているセレモニーである。晴れの舞台で世界に日本のメッセージを伝えるチャンスをみすみす失った。震災復興にたいする協力への感謝の言葉もあったのだから、きちんと世界に伝えたかった。

これは明らかに日本サッカー協会の失策である。佐々木監督と沢選手の受賞の確率はかなり高かったし、セレモニーの日まで十分な時間があつた。サッカー協会は事前に専門家を手配し、入念に英語スピーチのトレーニングを施す必要があつた。沢選手だって2年間もアメリカでプレーした経験がある。簡単なスピーチができなければ、名実共に一流選手の仲間入りはできない。プロテニスツアーに参加する選手は記者会見への出席が義務づけられ、通訳なしで受け答えすることが要求されている。優勝インタビューも必須の条件である。国際舞台で活躍することは、こういうセレモニーも含めてのことだ。

日本サッカー協会は選手のスピーチマナーや語学能力の向上に力をいれるべきで、それに必要なお金を惜しんではならない。サッカー界だけでなく、日本のスポーツ界はこのような国際化への初歩的準備ができていない。国際感覚の欠如と国際機関で要職を得られないことは無関係ではないだろう。